

小-44

### 下顎に発生した血管過誤腫の猫の1例

○村上祥子<sup>1)</sup> 高木 哲<sup>1)</sup> 賀川由美子<sup>2)</sup> 石塚友人<sup>1)</sup> 華園 究<sup>1)</sup> 金 尚昊<sup>3)</sup> 星野有希<sup>1)</sup> 細谷謙次<sup>3)</sup>  
奥村正裕<sup>3)</sup>

1) 北大附属動物病院 2) ノースラボ 3) 北大獣医外科学

【はじめに】血管過誤腫とは、成熟した血管構成細胞が無秩序に増殖することで異常な血管を多数形成する腫瘍性病変であり、その挙動は良性とされている。猫では過去に脊髄、脳、鼻腔および腎臓からの発生が報告されている。今回、下顎骨に血管過誤腫の発生を認め、関連する病態により斃死した猫の一例についてその概要を報告する。

【症例】アメリカン・ショートヘア、10歳齢、去勢雄、体重3.4 kg。1カ月前からの口腔内の微量出血と流涎を主訴に近医を受診し、右下顎の著しい腫大を認めたため、本院を紹介された。初診時、右下顎全域の腫大、歯肉の腫大と潰瘍および右眼の流涎を認めたが、開口障害は認められなかった。CT検査にて右下顎骨全域に著しい骨増生および骨破壊を伴い、顕著な造影増強を示す腫瘍性病変を認めた。病変組織は眼窩へ浸潤し、周囲の軟部組織は腫脹していた。組織生検時、顕著な出血を認め、その止血に難渋した。生検組織の病理組織学検査では骨梁間に豊富な血管を認め、構成細胞の分化度は高く、悪性所見が認めなかったことから、血管過誤腫と診断された。片側下顎骨切除を提示したが、この時点で採食に問題がないため飼い主から同意は得られなかった。第126病日、1週間前に口腔内から大量出血したことを主訴に再来院した。右下顎腫瘍はさらに増大しており、軽度の貧血と開口障害を認めた。外科的切除を予定したが、来院途中で急死した。多量の出血痕から失血または呼吸困難による窒息を疑った。右下顎骨病変部の病理組織学的検査において、粘膜下から骨組織を広範囲に置換するように複数の不整な血管増殖がみられ、血管過誤腫であることが最終的に確認された。

【考察】血管過誤腫は、発生異常に起因するまれな良性疾患とされている。本症例でも右下顎骨全域が腫瘍に置換されるまで無徴候で経過しており、増大は緩徐で若齢時より病変が存在していたと推測された。診断には、画像上での著しい造影増強の所見が診断の一助になる可能性がある。本症例の経験から猫の下顎に発生した血管過誤腫については、開口障害や著しい出血などの生命維持に関わる障害を呈するリスクがあることを考慮する必要がある。他部位に発生した本疾患の術後成績は良好であるため、下顎に発生した血管過誤腫においても診断後早期の外科的切除が推奨される。